

吉野地域の自然資源の保全活用に関する調査研究

奈良県立大学地域創造学部
教授 水谷 知生

1 調査研究の背景

岸田日出男は 1890（明治 23）年に吉野郡に生まれ、奈良県立農林学校を卒業後、吉野郡役所、後に奈良県の技手・技師となり、林業関係業務に従事し、1959（昭和 34）年に没した。岸田は、吉野群山の山岳、溪谷、森林を知悉し、広く社会に紹介し、保全活用に生涯尽力した。1936（昭和 11）年の吉野熊野国立公園指定まで 15 年間にわたり奈良、三重、和歌山の関係者と調整し広域の国立公園の指定に結びつけ、「吉野熊野国立公園の父」と呼ばれる。この時期の自然資源の保全の努力が、その後世界遺産登録にも結びついている。

2016（平成 28）年 12 月、岸田日出男の曾孫にあたる岸田高志氏から、大淀町教育委員会に大淀町北六田の岸田家に日出男の資料が残されているので調べに来てほしいとの連絡があり、教育委員会松田学芸員が調査し、箱を開け、資料を概略撮影し「岸田日出男資料写真一覧」（2017 年 1 月）としてまとめた。その時点で確認できた資料はダンボール箱 58 箱であり、書籍・雑誌、調査記録資料、書簡、写真、映画フィルム、動植物標本が含まれていた（図 1）。大正から昭和前期の資料であり、大淀町教委学芸員を中心とした地元関係者により、資料の整理活用の検討が進められることとなり、岸田家から大淀町の杉本記念文化センターに資料は移され、保管されている。

岸田日出男は、吉野熊野国立公園の指定に大きく関わり、その関連資料が多いことが予想されたことから、松田学芸員から当方に相談がなされ、資料全体の整理を行うこととなった。

資料の整理を進めることにより、大正・昭和前期の吉野・熊野地域における地域資源の保全活用の経過とそこでの岸田の役割を明らかにすることが可能となる。また、地元大淀町により岸田資料に関連したシンポジウムも企画されており、調査の成果は、岸田の活動を見直すとともに吉野地域の地域資源の今後の保全活用の検討に活用されることが期待される。

2 本年度調査について

本年度は、岸田日出男資料の内容確認と分類整理・リスト化を進めた。大淀町杉本記念文化センター 2 階の保管されている資料の解読、分類、整理、データベース作成を行なった。2017 年 8 月 19 日から 2018 年 3 月 7 日まで 32 日間、奈良県立大学地域創造学部の学生によりのべ 93 人日の作業を行ったが、本稿では作業記録も兼ね、作業内容、資料の特徴について述べる。

(1) 基礎リスト作成

奈良県立大学観光創造commons景観マネジメント分野の3回生によって、松田学芸員が撮影した「岸田日出男資料写真一覧」から判読できる資料をリスト化し、880点の初期リストを作成し、現場での整理作業の基礎とした。

(2) 田村剛資料の参照

日本では昭和初期に国立公園制度が成立し、12ヶ所の公園が指定された。当時国立公園を担当していた内務省衛生局で、田村剛(1890-1979)が1921(大正10)年頃から国立公園に関する調査を行い、その後、国立公園制度の制定や指定に長く関与する。この田村剛が残した資料が環境省自然環境局生物多様性センター(山梨県富士吉田市)に整理・保存されている。岸田日出男資料の分類・整理にあたり、国立公園を中心とした資料の分類・整理の例として、田村剛資料が参考となるため、整理方法、保存方法の調査を行なった。

田村資料は、自筆資料、書籍、その他資料に分類され、その他資料は国立公園関係、造園関係、観光関係、地図・図類、自然保護関係、海中公園関係などに細かく分類されている。整理は、個別の資料ごとにA4の透明ファイルに入れ、資料番号をファイルに貼り付け、透明ファイルを数個、A4版が収納できる紙のボックスファイルに収めている。ボックスファイルは150個ほどあり、A(国立公園関係)100-110などと、収納されている資料の内容が表示されている。

冊子になっていない紙の資料がばらばらになることを防ぎ、一体として保存が必要なものを透明ファイルに入れ、透明ファイル+ボックスファイルで収納する方法は、探しやすさ、取り出しやすさの面で有効と考えられた。一方で、資料を細かく分類して収納しているが、資料を探す者は、テーマごとに資料をみていく方法ではなく、リストで検索して資料番号から資料を探すこととなることから、分類ごとに資料をまとめておく必要性は必ずしも高くないと考えられた。また、明確に分類できない資料の扱いが難しいことが予想された。

(3) 岸田資料の整理方針

岸田資料の収納方法については、透明ファイル+ボックスファイルという田村剛資料を参考とし、分類については、岸田資料の内容に応じ、資料利用者の利便を図り、しかも、整理時にあまり分類で時間を要することのない方法とするため、映像資料、標本を除き、外形的に判断可能な以下に資料を分類して整理を進めた。

- (1)自筆原稿(本人自筆・第三者の清書によるもの)
- (2)古文書
- (3)自筆資料:古文書写/聞き書き/自筆資料(古文書写、聞き書きを除く)
- (4)公文書(奈良県関係)
- (5)文書(刊行されていない各種資料類)
- (6)写真:焼付け写真/ガラス乾板/ネガ/写真帳
- (7)書簡類
- (8)パンフレット(観光、その他)
- (9)絵葉書

- (10) 図書（刊行されたもの）
- (11) 雑誌（刊行されたもの）
- (12) 地図：地形図，地勢図（書き込みのないもの）／作業図（地形図を貼り合わせたもの／岸田の書き込みがあるもの）／その他地図類
- (13) 新聞（切り抜き）

（４）資料整理の状況

資料は、段ボール箱（No.1-58 と番号を振っている）に収められており、箱ごとに、（１）解読，（２）分類，（３）データベース入力，（４）透明ファイル収納，（５）ボックスファイル収納，（６）書棚に収納，の順番に進めた。（４）－（６）の作業は、ある程度分類，入力が済んだ資料がたまるとに行なった（分類状況は図 2 参照，ファイル収納状況は図 5 参照）。

自筆原稿，古文書写，聞き書きなどの自筆資料は，封筒（奈良県，吉野熊野国立公園協会，畝傍高等学校のものが多い）にある程度まとまって収められているものが多かった。奈良県や吉野熊野国立公園協会の封筒は，日出男自身が整理時に用いたものであろうか。畝傍高校の封筒は，日出男の没後，子息の岸田文男（1919-2015）が資料の整理を随時行った模様であるが，文男の職場が畝傍高校であり，その封筒が使用されたものと考えられる。

ただし，一つの封筒に，必ずしも同時期の資料，同一テーマの資料がまとまって収められているわけではなく，時期，資料の性質が異なるものが混ざって収められていることが多く，それぞれの内容を見た上で，整理，分類する必要がある，整理に多くの時間を割かれることとなった。また，自筆資料や文書が封筒に収められず，そのまま箱に収められているものも多く，封筒の有無は整理にあまり意味はなかった。

自筆資料の場合，時期が古いものは，墨で書かれたものもあるが，大半はザラ紙に鉛筆書きの資料であり，紙の劣化や鉛筆の濃さ，そもそもの日出男の筆圧の低さ等から判読の困難な資料も少なくなかった。さらに，作成時期の特定できない自筆資料も多くあり，資料のリスト化に際して，限られた情報しか入力することができないものも数多くあった。

資料が収められている箱に関しても，同一の資料が様々な箱に入っているなど，必ずしも内容に沿って分類されたものではなかった。

2017 年度には，文書類約 2500 点，写真類約 600 点のリスト化，データベース化を行なった。文書類のリスト化は，(1)自筆原稿，(2)古文書，(3)自筆資料，(4)公文書（奈良県関係），(5)文書（刊行されていない各種資料類），(8)パンフレット（観光，その他），(10)図書，(11)雑誌，(12)地図類については，ほぼ終了し，(7)書簡類，(9)絵葉書，(13)新聞（切り抜き）のリスト化は未了である。また，色紙類が残されているが，この整理は未着手である。

写真類については，ガラス乾板，ネガ，写真帳のリスト化は終了したが，焼付写真については約 2-3 割のリスト化が未了となっている。資料全体としては 9 割以上の整理，リスト化が終了している。

3 資料の特徴について

- (1) 自筆資料（古文書写，聞き書き記録）

自筆資料の大半を占めるものが、吉野郡内の各地での古文書を書き写した記録、聞き書きの記録である。岸田が写し取ったあるいは聞き取った場所、時期、内容は多様であり、場所や時期の情報が明記されていない記録もある。また、保存状況も、同一の袋に入っている古文書写や聞き書き記録にどのような共通性があるか不明なものも多い。古文書写目録、聞き書き目録といった一覧も一部残されていたが、資料の全貌を把握できる内容のものではなかった。今回の整理・リスト化では、これらの資料を逐一解読し、時期や場所、内容の整理をすることは困難であり、古文書写、聞き書き記録の全体像を把握することはできなかった。一部、場所、時期をリストに記入したものもあるが、大半は古文書写、聞き書き、としてまとめるにとどまっている。

古文書写については、寺院や旧家に所蔵されているものを書き写したものであり、時期的には昭和 20 年代以降のものである。古老からの聞き取り記録も昭和 20 年代以降のものである。岸田日出男が特定のテーマを持って、古文書を写し、聞き書きをしていたかどうかは、現段階では整理できず、今後、古文書写、聞き書きの記録を重点的に整理し、その全体像を明らかにすることによって、岸田の残した資料の意味が明らかになり、その資料的価値が高まると考えられる。

(2) 自筆原稿

岸田の著作で雑誌などに掲載されたものについては、「岸田日出男遺文集 1-16」などの形で製本されたものが残され、これ以外にも、自筆原稿そのものが製本されたものもある。これらは、岸田日出男没後に文男によって製本されたものと考えられる。自筆原稿には、これら著作物の草稿段階のものから印刷用原稿まで、多種類のものが残されている。草稿段階のものが何種類も残されているものもあり、すべての原稿を破棄せずに残していたものと考えられる。また、最終的に印刷されなかった原稿も多く残されている。

(3) 地図類

岸田は吉野地域の地形図をはじめ、旅行で訪れる地域の地形図を購入し、持参していたと考えられる。また、地形図については破棄せずに残しており、子息の友良が学校で作業した作業図も残されている。5 万分の 1 地形図、20 万分の 1 地勢図のうち書き込みなどのない形のものが 180 種類残されており、北は十和田、八甲田から、月山、磐梯山、日光、佐渡、富士、南アルプス、北アルプス、御嶽、大山、石鎚山、霧島、朝鮮半島まで、多くのものが残されている。その他、吉野地域の地形図は、大峰山系や大台ヶ原の部分を貼り合わせた作業図も多数残されており、山行の行程図もあり、残されている写真と照合することで、撮影場所を特定することが可能なものもある。

陸地測量部の地図以外にも民間発行の分県地図なども多く残されているが、大正年間の「日本府県管内地図」(駿々堂)などは、公共図書館にも残されているものが多くなく、貴重な資料である。その他、奈良県の管内図、市町村管内図なども多く残され、大正期、昭和初期の地図類は希少価値が高いと見られる。

(4) 映像フィルム

35mm の映像フィルムが 4 点残されており、資料整理作業とは別途、IMAGICA ウェス

ト社に簡易デジタル化を依頼し、パソコン等で閲覧できる形となった。古いものは約100年前のフィルムであったが保存状態は良好で、映像は鮮明に残されていた。フィルムについての説明はなかったが、関係資料からその内容を特定できた。

(a) 「吉野群峯」の映像（2巻）

○35mm ポジフィルム 1922（大正11）年内務省衛生局「吉野群峯」あるいは「大和アルプス群山」3巻のうちの2巻目 約540ft

○35mm ポジフィルム 1922（大正11）年内務省衛生局「吉野群峯」あるいは「大和アルプス群山」3巻のうちの3巻目 約350ft

この映像の撮影隊の行程は、大和山岳会の機関誌『山嶽第1回』（1922（大正11）年10月）に杉田定一「フィルム旅行1 大和アルプス」、堀内竹蔵「フィルム旅行2 大蛇窟」、
「内務省活動写真撮影」という記録で残されており、1922（大正11）年8月に内務省衛生局の撮影隊が撮影した吉野群山の記録映像と特定された。全3巻のうちの第2巻、第3巻とみられ、第1巻は保管されていなかった。内務省衛生局の依頼を受けた東京の粕谷技師（兄弟）が登山の様子を撮影したものである。務省衛生局で国立公園の調査を始めていた田村剛が同行し、この山行は国立公園調査としても行われた。大正末期の大台ヶ原、大峰山系の風景を映像化したもので、奈良県内に現存する最古の映像記録である可能性が高い。このフィルムは、1922（大正11）年10月に奈良市の尾花座でおこなわれた「大和山岳会発会式」で上映された記録があり、大和山岳会の事務局的役割を担っていた岸田日出男の手元にフィルムが保管されていたと想定される。

(b) 瀨峡の映像

○35mm ネガフィルム 1923（大正12）年奈良県十津川村「十津川郷の探勝」4巻のうちの4巻目 約370ft

瀨峡の映像。フィルム缶にタイトルはなかったが、奈良県公園課編『大和山岳踏破記』（1924（大正13）年）所収の中村鷹嶽「十津川郷探検旅行記」に撮影の記録があり、また、奈良県内務部編の「県下活動写真フィルム一覧」（『奈良県社会教育概況』1925（大正14）年）に、吉野郡十津川村所有「十津川郷の探勝（全4巻）」（大正12年12月、東京・粕谷助次郎より購入）との記録がある。映像内容と撮影記録から、十津川村が所有していたものの4巻目と推定され、1923（大正12）年8月に撮影された映像とみられる。先の内務省衛生局の撮影を行なった東京の撮影技師・粕谷助次郎が、十津川村の依頼をうけて撮影したものと考えられる。上映用のポジフィルムではなく、ネガフィルムであり、撮影したフィルムそのものである可能性が高いが、上映用でもないフィルムをどういう理由で岸田が保管していたのかは不明である。

(c) 「熊野路」

○35mm ポジフィルム 1937-38（昭和12-13）年 鉄道省「熊野路」1巻343m

鉄道省企画、J・Oスタジオ撮影と画像にあり、1937（昭和12）年6月に内務省の検閲（検閲番号はL14691）を受けている。『熊野路』というタイトルの上映用フィルムである。1936（昭和11）年2月に指定された吉野熊野国立公園の紹介フィルムと考えられる。岸田が入手した経路、保管していた経過は不明である。

フィルムの素材は、いずれも発火性の高いナイトレートフィルムであり、危険物となり通常の状態での保管することはできない。そのため専門施設での保存が必要となる。

(5) 写真類

写真類は、焼付写真、ガラス乾板、ネガ、写真帳（焼付写真が貼り付けられたもの）に4分類した。焼付写真は4つ切りのものから小サイズのものまで多様であり、キャビネサイズと手札版が最も多かった。

ガラス乾板は数は多くなく、岸田が自らのカメラで撮影したものではないと考えられる。しかし、1920（大正9）年、1921（大正10）年の家族写真のガラス乾板もあることから、これらはカメラを借りて撮影したと考えられる。

ネガは数が多く、ほとんどが3.25×4.25インチ（8×10.5センチ）の手札版のシートフィルムであり（図3）、岸田がこのサイズのシートフィルムを撮影できたカメラを所有していたものと考えられる。年代を特定できるネガは多くないが1929（昭和4）年以降撮影のものとして推定され、この時期に岸田が自らのカメラを購入し、持ち歩いて撮影していたと考えられる。なお、ネガの一部は癒着して分離不能となっている。

焼付写真の多くは、大峰山系、大台の山容、溪谷を撮影したもので、吉野の桜の写真も多くみられる。瀨峡や熊野海岸の写真は、新宮の久保写真館撮影のもの（写真を送付した記録が残されている）が多く見られ、岸田は吉野、熊野の風景写真を多方面から集め、紹介に用いていたものと考えられる。焼付写真のそれぞれが誰によって撮影されたものか、特定できるものは多くない（図4は焼付写真の例）。

写真帳は、吉野熊野国立公園協会作成となっているものが多く、国立公園指定のための説明資料として使用されたものと考えられる。その他の写真帳は自らの保存用に作成したものか、あまりテーマが統一されていない。

吉野郡内の集落を写した写真も残されており、現在の景観と比較することで、この100年の変化を検討する材料として有効である。

4 資料の活用について

2017年度に大半の資料の整理、リスト化、データベース化は行うことができたが、古文書写、聞き取り資料については、分類整理が十分でなく、今後、これらの資料の活用の際には、内容の精査が必要となってくる。

それ以外の資料については、ある程度の整理ができており、データベースでの用語検索で、必要な資料の所在が確認できる状況にある。整理が未了の部分もあるが、吉野郡の100年～50年前の状況を把握できる資料群として、幅広い活用が行われることを期待する。

岸田資料の整理には、奈良県立大学地域創造学部景観マネジメント分野の、隈崎涼、中塚香織、滝沢啓介、上田栞里、雑賀真由美が夏期冬期休業期に大淀町でボランティアに作業を行い、またゼミ活動として同分野の鹿子嶋朋佳、奈良将吾の協力を得て、2017年度の作業を行うことができた。諸氏の尽力に深謝する。



図1 岸田日出男資料の岸田家での収納状況（2016年12月 大淀町教育委員会
松田学芸員撮影）



図2 岸田資料の分類整理状況（2017年8月29日、自筆資料の状況）



図3 岸田が撮影したネガ (3.25 インチ×4.25 インチ)



図4 資料として残されていた 1922 (大正 11) 年の内務省撮影隊と同行者の写真

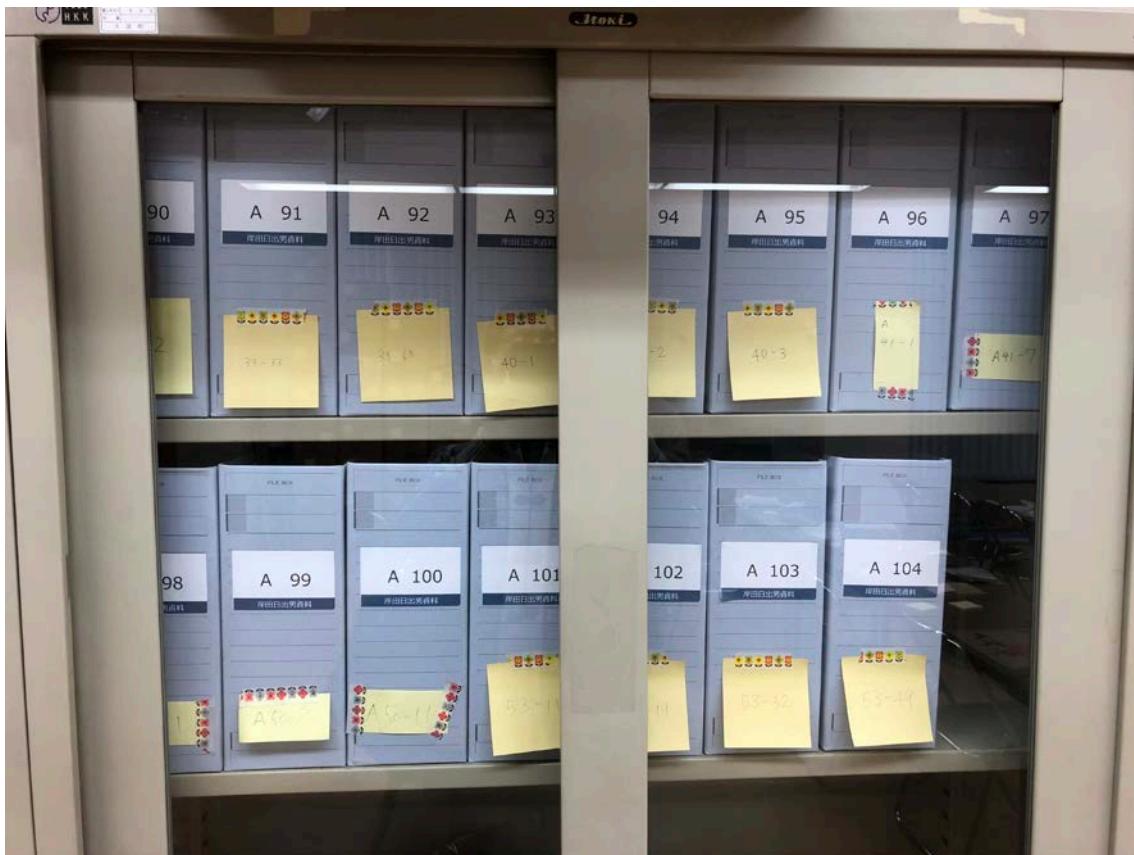


図5 岸田日出男資料の杉本記念文化センターでの収納状況 (2018年3月)